

夏目漱石

無題

無題

— 大正三年一月十七日

東京高等工業学校において —

私はこの学校は初めてで——エー来るのは初めてだけれども、御依頼を受けたのは決して初めてではありませんせん。二三年前、田中さんから頼まれたのです。そのころ頼みに来てくださったかたはもう御卒業なさったでしょう。それ以来十数回の御依頼を受けましたが、みんなお断りしました。断るのが面白おもしろいからではなく、やむをえないからで、このやむをえないことが度重たびかさなってお気の毒なので、その結果今日きょうやって来ました。いわば根こんくら

べで根がつきて出て来たようなしまつであります。だから面白いお話もでき兼ねます。今からとにかく一時間ばかりお話します。それゆえ、題なんかありません。

私は専門があなたがたとは全然違っています。こんな機会でなければ顔を合わすことはありませんが、これでも私は工業の部門に属する専門家になろうとしたことがあります。私は建築家になろうと思ったのです。なぜってというような問題ではない。けれどももついでだから話します。

まだ子供こどものとき、財産がなかったので、一人ひとりで食わな

ければならないということを知っていました。忙いそがしくなく時間づくめでなくて飯いが食くえるということについて非常に考えました。しかし立派りっぱな技術を持ってさえいれば、変人でも頑固がんこでも人が頼たのむだろうと思おもいました。佐々木東洋ささきとうようという医者があります。この医者が大たいへんな変人で、患者をまるで玩具がんぐか人形のように扱あう、愛嬌あいきょうのない人です。それではやらないかと言いえば不思議なほどはやって、門前市いちをなす有様ありさまです。あんな無愛想ぶあいそうな人があれだけはやるのは、やはり技術があるからだと思おもいました。それだから建築家になつたら、私も門前市をな

すだろうと思ひました。ちやうどそれは高等学校時分の事よねやまやすさぶろうで、親友に米山保三郎という人があつて、この人は夭折ようせつしましたが、この人が私に説諭わがくにしました。セント・ポールズのような家は我国くだにははやらない。下らない家を建てるより文学者になれと言ひました。当人が文学者になれと言つたのはよほどの自信があつたからでしょう。私はそれで建築家になることをふつつり思ひ止とどまりました。私の考かんがえは金をとつて、門前市をなして、頑固で、変人ふたりで、といふのでしたけれども、米山は私よりはたいへんえらいような気がした。二人くらべると私がいかに

も小^{ちっ}ぼけなように思われたので、今までの考を止^やめてしまつたのです。そして文学者になりました。その結果は——^{わか}分りません。おそらく死ぬまで分らないでしょう。それで私とあなたがたとは専門が違ふことになつたのですが、この会は文芸の会で、ベルグソンなども出るようですから、多少は共通しているところもあるようにも思われます。それでまあ私もお話をするというようなわけです。よく講演なんていうと西洋人の名前なんか出てきてききにくい人もあるようですが、私の今日のお話には片^{かた}仮^か名^なの名前なんか一つもでてきません。

私はかつてある所で頼まれて講演した時、「日本現代の開化」という題で話しました。今日は題はない。分らなかったから、こしらえませんでした。

その講演のとき開化の *definition* を決めました。開化とは人間の *energy* の発現の径路で、この活力が二つの異った方向に延びていって入り乱れてできたので、その一つは活力節約の行動といって *energy* を節約せんとする吾人の努力、他の一つは活力を消耗せんとする趣向、すなわち *consumption of energy* である。この二つが開化を構成する大なる *factors* で、これ以外にはなににもな

い。ゆえにこの二つのものは開化の factors として sufficient and necessary である。

それで第一の活力を節約せんとする努力は種々の方向へ出るが、まず距離をつめる、時間を節約する。手でやれば一時間かゝる事も、機械で三十分でやってしまう。あるいは手でやれば一時間かかって一つできるところを、十も二十もつくる。そうして吾々の生活の便を計るのです。これがあなたがたの専門のものであります。他の factor すなわち consumption of energy の努力は積極的のもので、ある種の人達からは国力等の立場より見做

して消極的なものと誤解されている、文学、美術、音楽、演劇等はこの方面に属します。これ等らのものではなくてすむものであります、しかもありたいものなのです。これ等は、いくぶんか片方で切りつめて余った energy をこっちのほうに向ける、どちらかといえは押しのふといほうなのです。私等はこの方面へ向むって行く。この方面からいえば時間距離なんていう考はありません。飛行機——飛行機のような早いものの必要もなく、堅牢けんろうなものの必要もなく、数でこなす必要もない。生涯しょうがいにたった一つだっていゝものを書けばいゝのです。すなわち私共ども

とあなたがたとはかく反対になっているのです。——二つのものの性質を概括していうと、あなたがたの方は規律でゆき、私共のほうは不規律でゆく。その代り報酬はごく悪い。金持になる人、なりたい人は、規律に服従せねばならない。あなたがたの方は *mechanical science* の応用で、私共のほうは *mental* なのだから割がいいようだが、実はたいへんに損をしているのです。しかしあなたがたは自由が少いが、私共は自由というものがなければできない仕事であります。なお言いかえれば、あなたがたは仕事に服従して我というものをなくなさなければ

できないのです。各自個々勝手な方面へ行つたなら、仕事はできない。私共のほうは我を發揮しなければ、なにもできません。

そこで、あなたがたのほうでする仕事というものを見ると、普遍的すなわち universal の性質を持っている。私共のほうは universal でなくて personal の性質を持っています。なお敷衍ふえんして言えば、あなたがたはまず公式を頭のなかに入れて、その application が必要である。それは人間が考えたものに違いないけれども、私がこのものがいやだと言つても御免蒙ごうむることはできない。

universal と personality とは personality という個人としての人格じゃなく、personality を eliminate しようる仕事なのです。この鉄道は誰が敷設した^{だれ}ということは素人^{しろうと}にはあまり参考になりません。この講堂は誰が作ったって問題にならない。あすここにぶらさがってるランプだか、電気だかなんだか知らないが、これにはなんの personality もない。すなわち自然の法則を apply しただけなのであります。

しからは吾々の文芸は法則を全然無視しているかと言うと、そうでもない。ベルグソンの哲学には一種の法則

みたいなものがある。フランスではベルグソンを立場として、フランスの文芸が近ごろ出てきている。しかし吾々のほうでは sex の問題とか naturalism とか世間に知れ互^{わた}った法則等から出立するものは、その abstraction の輪廓を画^かいてその中につめこんだのでは、生きてこない。内から発生したことになる。拵^{こしら}えものになる。すなわち吾々の方面では、abstraction からは出立されないのです。しからは文学者の作ったものから一つの法則を reduce することはできないかと言うと、それはできる。しかしそれは作者が自然天然に書いたものを、他の人が

見てそれに philosophical の解釈を与えたときに、その作物のなかからつかみ出されるもので、初めから法則をつかまえてそれから肉をつけるというのではありません。吾々のほうでも時には法則が必要です。なにゆえに必要であるかと言えば、これがために作物の depth が出てくるからである。あなたがたの法則は universal のものであるが、吾々のほうでは personal なものの奥に law があるのです。というのは、すでにできた作物を読む人々の頭のあいだをつなぐ共通のあるものがあつた時、そこに abstract の law が存在しているという証拠になるのです。

personal のものが、universal ではなくても、百人なり二百人なりの読者を得たとき、その読者の頭をつなぐ共通なものがない。なくてはならぬ。これがすなわち一つの law である。

文芸は law によって govern されてはいけない。personal である。free である。しからばまるで無茶なものである。決してさようではないと言うのであります。

かようにあなたがたの出発点と吾々文芸家の出発点とは違っている。

そのものの性質より言えば、吾々のほうのものは *personal* のもので、作物を見て作った人に思い及ぶ。電車の軌道は誰が敷いたかと考える必要はないが、芸術家のものでは、誰が作ったということがじき問題になる。したがって製作品に対する情緒がこれにうつつて行つて、作物に対する好悪の念が作家にうつつて行く。なおひろがって作家自身の好悪となり、けつきよく道德的の問題となる。それゆえ当然作物からのみ得られべき感情が作家に及ぼして、仕舞しまいには *justice* ということがなくて、ひいき 鼻負ひいき というものができると。芸人にはこの鼻負が

特に甚はなはだしい。相撲すもうなんかそれです。私の友人に相撲のすきな人があるが、この人は勝ったほうがすきだと申します。この人なんか正義の人で、公平で、決して臍負ではない。臍負になるとこんな事ができない。かく芸を離れて当人になってくるのは角力すもうか役者に多い。作物になるとさほどでもないようにもみえる。

これほどまでに芸術とか文芸とかいうものは **personal** である。personal であるから自己に重きを置く。自己がなくなったら **personal** でなくなるのはあたり前まえであるが、その自己がなくなれば芸術は駄目だめである。

あなたがたに尊とうとぶことは、自己でなくして腕である。腕さえあれば能事おわ了れりと言うてもよい。工場では人間がいらぬほどあつても、その人間は機械の一部分のよなものである。mechanical に働く、機械よりも巧妙に働く、腕が必要である。が、吾々のほうは人間であるということが大切なことで、社会上より言うときはお互に社会の一員であるけれども、吾々のほうは貴方あなたがたに比べて人間ということが大事になる。

ところがこゝに腕の人でもなく頭の人でもない一種の人がある。資本家というものがそれである。この capitalist

になると、腕も人間も大切でなく、たゞ金が大切なのである。capitalist から金をとり上げればゼロである。なんにもできない。同様にあなたがたから腕をとり上げても駄目である。吾々は腕も金もとり上げられてもいゝが、人間をとり上げられてはそれこそ大變である。

あなたがたのほうでは技術と自然との間になんらの矛盾もない。しかし私共のほうには矛盾がある。すなわちごまかしがきくのです。悲しくもないのに泣いたり、嬉うれしくもないのに笑ったり、腹も立たないのに怒おこったり、こんな講壇の上などに立ってあなたがたから偉く見られ

ようとしたりするもので——これはある程度まで成功します。これは一種の art である。art と人間の間には距離を生じて矛盾を生じやすい。あなたがたにも人格にない art を弄ろうしていることがたくさんある。すなわちねむいのに、睡ねむくないようなふりをするなどはその一例です。かく art は恐ろしい。吾々にとっては art は二の次で、人格が第一なのです。孔子こうし様でなければ人格がない、なんていうのじゃない。人格と云ったってえらいということでもなければ、偉くないということでもない。個人の思想なり観念なりを中心として考えるということであ

る。

一口に言えば、文芸家の仕事の本体すなわち *essence* は人間であって、他のものは付属品装飾品である。

この見地より世の中を見わたせば面白いものです。こういうのは私一人かもしれませんが、世の中は自分を中心としなければいけない。もつとも私は親が生んだので、親はまたその親が生んだのですから、私はたゞ一人であつりと木の股またから生れたわけではない。そこでこういう問題が出てくる。人間は自分を通じて先祖を後世に伝える方便として生きているのか、または自分そのものを後

世に伝えるために生きているのか。これはどつちでもいゝことですけれども、とりようでは二様にとれる。親が死んだからその代理に生きているともとれるし、さようでなくて己おのれは自分が生きているんで、親はこの己を生むための方便だ、自分が消えると気の毒だから、子に伝えてやる、ということに考えても差さしつかえ支ない。この論法から言うと、芸術家が昔の芸術を後世に伝えるために生きているといふのも、不見識ではあるが、やっぱり必要でしょう。ことに旧芝居しばいやお能のうなんかはいゝ例です。絵画にもそれがある。私は狩野元信かのうもとのおぶのために生きてい

ので、決して私のためには生きていのではないと看板をかける人もたくさんある。こういうのは身を殺して仁をなすというものでしょう。しかし *personality* の論法でゆくと、これは問題にならない。こんな人はとりのけて、ほんとに自覚したらどうだろう。すなわち *personality* から出立しようとする、狩野のために生きるのをよして自分のために生きようとすることにしたらどうだろう。世の中にはまったく同じ事は決して再び起らない。*science* ではどうだか知らないけれども、精神界ではまったく同じものが二つは来ない。ゆえにいくら旧様を守

ろうとしても、全然旧には復かえらない。なお他の一つは旧にかえるのではなく新しい departure をする。これらによつて essential な personality を発揮することができぬ。

導体的の文芸家美術家も、必要かもしれないが、人間の本分として、すべての人は自覚しなければならぬ。こゝが大切なところでじゅうぶんに説明しなければいけないんですが、今日は時間がないからこれで止やめます。

私の言うたことは、あなたがたと私共との職業の違いから出立して、私共のほうのことを精くわしく言ったのでありますけれども、同時にまたあなたがたのほうにもある

程度までは応用が利きくかと思ひます。あなたがたの職業の方面においていくぶんか参考になることがありはしないかと思ふのです。もつとも文芸部の会ですから応用が利かなくつても、威張つてそういう権利があります。しかし個人としてなり、職業としてなり、あなたがたの御参考になれば、私は非常に嬉しいのであります。——それだけです。

(東京高等工業学校校友会雑誌所載の略記による)

日本文学電子図書館

無題

著者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底本 「漱石全集 第11卷」 角川書店

昭和42年7月30日 7版発行

日本文学電子図書館